

## ハイデルベルク信仰問答講解説教20「神は共におられる」(2012年1月15日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

神よ、わたしの内に清い心を創造し／新しく確かな霊を授けてください。御前からわたしを退けず／あなたの聖なる霊を取り上げないでください。御救いの喜びを再びわたしに味わわせ／自由の霊によって支えてください。(詩編51：12-14)

「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。(ヨハネ14：15-17)

## 【説教】

今日は、第20主日、問53の部分を手がかりにして御言葉に聴いてまいりたいと思います。この部分は言うまでもなく「聖霊」の信仰が扱われております。ハイデルベルク信仰問答は、ここまで「使徒信条」に従って問答を重ねてきましたが、ここで信仰問答は、使徒信条の第三項、聖霊の項に入ったということです。「我は聖霊を信ず」と今日も礼拝の中で告白いたしました。その時に、わたしたちは聖霊の一体何を信じているのでしょうか。

ちなみに使徒信条は、第三項、聖霊の項において「我は聖霊を信ず」と告白したその後に、「聖なる公同の教会」「聖徒の交わり」「罪の赦し」「身体よみがえり」「永遠の命」と言葉が続けます。実は、そのいずれもが聖霊の信仰の中で捉えるべきものであるということ、その構造は示しております。そしてこの点をもちろんハイデルベルク信仰問答も引き継いでおりますが、更に信仰問答は、聖霊の信仰について、改めてわたしたちがキリストによって罪赦され義とされること、そして義とされたわたしたちが感謝の実を結ぶこと。すなわち感謝の生活、善い行いへと導かれていくことまで含めて聖霊の御業としています。

聖霊というと、実体のない、不確かな存在と多くの人々は考えるかもしれませんが。実際、「霊」という言葉は、非常に曖昧でつかみ所がない。そこに日本人特有の霊感覚が加わり、聖霊についての様々な誤解が生じてまいります。例えば日本人の感覚で霊と言えば、死んだ人間の魂のようなものをイメージするでしょう。そういう霊魂が山に住み着く。森に住み着く。そしてそういう魂を鎮めるために祭を行う。日本の各地に無数に存在する祭はすべてこの霊にまつわるものであります。あるいは霊に憑かれるという。人に取り憑く。動物に取り憑く。また開運や幸運といったものがそういう霊の取り憑きによって起こると考える。「今日は憑いている」と言うように、そういう霊の取り憑きが日常的なものとして受け入れられている。そういう霊感覚がある土壌において、聖霊の信仰も単なる精神論的な実体のないもの、あるいは霊の取り憑きのように捉えてしまう。しかし使徒信条、そしてこのハイデルベルク信仰問答が明らかにしております聖霊の働きは極めて明確であり、かつ具体的であり、実体を伴うものであります。

こういう霊の理解については、何も日本の教会だけが困難であるということではなく、初代教会の時代から、教会は正しい聖霊の信仰の確立のために絶えず闘ってまいりました。「愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい」(1ヨハネ4：1)とあります。これは「霊の識別」といって古来教会が努めてきたことであります。キリストの霊と反キリストの霊をしっかりと見極めなくてはならない。またゴリシャ的なグノーシス霊肉二元論や霊魂不滅が教会においても影響を与えました。これは今日に至ってもなお教会の中に影響を与え続けていると言ってもよいでしょう。

更に、現代においては、熱狂主義的な聖霊理解が教会に混乱を来すことがあります。何か神秘的な体験をすることが聖霊の働きであるかのような誤解が生じてきます。また聖霊を人間が自由に操ることができるかのような行為もなされます。そういうことへの反動もあって、教会は聖霊について語ることに消極的になってしまう傾向にあります。それ故に聖霊については一層曖昧なまま放置され、個々の体験や判断に委ねるようなことにさえなっているのです。そしてそういう聖霊信仰の弱さが明らかにわたしたちの信仰生活に弊害をもたらしております。

わたくしが教会を教会として感じることは、信仰と生活とのつながりが弱いということです。言葉を換えると、信仰が生活化していない。実体が伴わないということです。ただ精神論的なもの、気休めに留まっているように感じます。教会生活が趣味や気分転換の延長のようなものになっている。つまりあってもなくてもいい。教会に行かなくても別に生活が困るわけでもない、気が向いたら教会に行く、聖書を読んでもみる。その程度なのです。礼拝もその時は霊的に高揚するかもしれませんが。しかし礼拝が終われば途端に世俗の状態に戻るのです。場合によっては、そのすぐ後から悪口や陰口のようなものを口にしている。たった今、礼拝をささげ、神さまに讃美と祈りをささげた、その同じ口が人を悪く言う言葉で満たされるのです。これは一体どうしたことなのでしょう。

いや、あなたは牧師だから一日中信仰のこと、教会のことばかり考えることができるのであって、そういう環境になればそうはいかない。でもそれは環境の問題でしょうか。職業の問題でしょうか。牧師にも皆さんと変わらない日常があります。子育ての苦労もいたします。夫婦喧嘩もあります。それは牧師としてというより、あくまでも一信仰者としての日常です。皆さんと同じです。そこでは一人の信仰者として神さまの前にごう生きるかがいつも問われているのです。時として信仰とは正反対の生き方をしてしまう。神さまのことをすっかり忘れてしまい、人間的な思いに支配されてしまうこともあります。そこで人間の罪深さを感じます。その葛藤が絶えずあります。それは場合によっては皆さんよりも激しいものかもしれません。御言葉を取り次ぐという務めに関わる者だけに、その落差に愕然とするのです。相応しくない自分を恥じ入るのです。わたくしは牧師の家庭に生まれ育ちました。反抗期にあった時には、牧師である父に向かって「それでも牧師か」と吐き捨てるように言葉をぶつけたこともあります。でもそれは今、自分自身に戻ってきている。自分こそこんな者がよく牧師などと言えるものだときれるのです。それこそ信仰が自分と乖離している。自分の中に信仰が生きていない。そういう現実を突きつけられる。こういう自分をどうすればいいのでしょうか。

でも、そのように考え悩む時に、わたくしはこの信仰問答の言葉がスーッと入ってくるのです。問53、「第二に、この方はわたしに与えられたお方でもあり」とあります。御父や御子と

同様に永遠の神である聖霊、つまりそれは三位一体の信仰が言われていますが、その聖霊なる神さまがわたしに与えられている。つまり真の神さまがわたしの中に与えられているというのです。ちょっと待って、そんなはずはないと思う。自分は信仰者として相応しくない。そんな自分でどうして神さまが与えられていると言い切れるのか。

この問答の根拠となっている御言葉が幾つかありますが、例えば今日読みましたヨハネ福音書のところもそうでしょう。また1コリント6章19節に「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神の神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです」とあります。確かに聖書もそのことを証している。でも何のためと思うでしょう。何のために聖霊が与えられ、この身にまことの神さまが宿るといえるのでしょうか。それはこの信仰問答が明らかにしているように、「まことの信仰によってキリストとそのすべての恵みにわたしをあずからせる」ためなのです。そしてそのようにしてわたしを慰めてくださるためなのです。

確かに、わたしは信仰に相応しくない。でもだからこそ神さまは聖霊を与え、絶えずわたしをキリストへ結びつけ、その恵みに、つまり罪の赦しと復活の新しい命へと与らせてくださる。そのような神さま御自身の助けがどうしても必要なのです。自分の力でそれができればいいでしょう。でもできない。だからこそ神さまは聖霊をお与えになるのです。今日のところでは「弁護者」と訳されていますが、以前の口語訳では「助け主」とありました。わたしたちを信仰に留まらせ、助け励ます神さま御自身の働きがあるのです。これは何という慰めでしょう。

もう少し踏み込んで考えてみましょう。「キリストとそのすべての恵みに与らせ」とは、このわたしの内にキリストがいよいよ立ち上がってくる。キリストの命を実感するということです。わたしたちは洗礼を受けてキリストと一体になるのですが、そのキリストの命がわたしの中に満ちてくるのです。パウロはガラテヤ書の中で「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(2:20)と告白します。わたしがわたしであって、わたしではない。わたしの中にキリストを実感する。これは聖化ということです。

ハイデルベルク信仰問答では、問24で使徒信条を三つの部分に分け、第一項は父なる神とわたしたちの創造、第二項は子なる神とわたしたちのあがない、そして第三項は聖霊なる神とわたしたちの聖化と言います。他にもない聖霊の御業を聖化としているのです。それはわたしたちがキリストと結ばれ、罪に死に、新しい命に復活する。その復活の命をわたしたちが体現するということです。フィリピ書では「わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」(3:21)とあります。キリストと同じ形になる。もちろんこの地上の歩みにおいては完成に至っておりません。それは終わりのときに完成されるのです。でもその完成を目指し、上にあるものを求めて、日々前進する。そのような聖化の歩みが起こされる。それが聖霊の御業なのです。

ちょうどこの前のところでキリストの昇天のことを学びました。問49でキリストの昇天がもたらす益について次のように言っています。問49を読みましょう。「御自分の霊をわたしたちに送ってくださる」それは聖霊のことですが、その聖霊によって、わたしたちはキリストの恵みを体感するのです。天にある体を体感する。そしてこの日々の具体的な生活、生き方にそれがあらわれてくる。ガラテヤ書では「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」(5:22-23)とあります。聖霊がそのようにわたしたちを導くのです。

今日は、詩編第51編のところを読みました。ここは悔い改めの詩編として、礼拝の中でも繰り返し、罪の告白として交読するところです。これはダビデが読んだ詩とされていますが、ウリヤの妻バトシェバを奪ったことを預言者ナタンに叱責された時に読んだと見出しにあります。つまりダビデが深い罪の中で求めたことは、「あなたの聖なる霊を取り上げないでください」

ということでありました。聖霊によって、「御救いの喜びを再びわたしに味わわせ」てください。そういう切なる祈りがここにあります。わたしたちもダビデと同じ祈りを祈るのではないでしょう。でもわたしたちはここに確信するのです。わたしたちに聖霊が与えられている。主がこの助け主、弁護者を与えて、わたしたちを御前に執り成し、整えてくださる。そのような神さまがわたしの中に、わたしと共におられることを。それがわたしを力づけるのです。お祈りをいたします。